

## 『中国に入ったら中国式交渉術に従え！』

—外人・熟人・自己人を理解すれば失敗しない—

- 平沢健一、安藤雅旺 共著
- 日本経済新聞社

多くの日本企業が本格的に中国進出した2000年以降、SARS騒動、靖国問題や尖閣列島の国有化に端を発した反日暴動、とりわけ昨年の日系企業への放火や略奪など、時に厳しい環境の中で事業活動を進めざるを得ない状況にある。

一般的に日本人は中国人に対して違和感を持たないといわれる。なぜなら同じような風貌、漢字文化を共有しており、また、中国に駐在してみると分かることだが、生活の中に共通のものが少なからず含まれていることに気づく。しかし、実際には中国人の行動や考え方はむしろアメリカ人に似ているのではないかと思うくらい、その違いにも驚かされる。

平沢健一氏と安藤雅旺氏の共著である本書は、中国人を理解するのに欠かせないキーワード「関係」(guanxi: グワンシ)について解説している。日本人はプライベートな関係をビジネスの場に持ち込まないのが普通だが、彼らは違う。人間関係をビジネスの場で堂々と使いこなす中国人のこの考え方を理解しようとしな<sup>あつれき</sup>いことから生じる軋轢も少なくない。

著者は、どちらも中国に駐在経験を持ち中国事業にも精通しており、実体験に基づく貴重な内容は中国事業で苦労したことのある人の共感を呼ぶ。多くの著名人や駐在経験者のビジネスを通じて得られた豊富な体験事例も掲載されており、社内外で実際に起こった失敗事例などは教訓として参考になるものが多い。

困難な状況に直面した際には、ぜひ本書を一読願いたい。中国事業に関係する諸氏にはお薦めの一冊である。(H) (21cm、240ページ、2000円+税、2013年7月刊)

## 『そろそろ、世界のフツーをはじめませんか』

—いま日本人に必要な「個で戦う力」—

- 今北純一、船川淳志 共著
- 日本経済新聞出版社

長く続いた閉塞感の中でグローバル人材が切実に求められている日本において、「なぜ日本人は変わらないのか?」という疑問を呈している。そんな本書に対し、一部の変わらない日本人からは、「それはもう聞き飽きた」という罵声と諦めの声が聞こえてきそうである。

著者は2人とも日本で大学を卒業後、日本のメーカーで働き、米国留学を経て海外で仕事の経験を積み、現在は経営や人材育成の分野でコンサルティングをしている。その2人が、これまで世界で苦労し直面して学んだ様々な体験談や教訓などを踏まえて、共通の問題意識を対話形式で議論する。

かつて世界をリードした日本製品・技術のガラパゴス化が指摘されて久しいが、人材も同様にガラパゴス化しているのではないだろうか。日本だけで通用しているエリートと世界でフツーに通用する人材との違いがどこにあり、なぜ違うのかという問題意識だ。

「世界のフツー」には6つの力が必要とのこと。ここで言う「世界のフツー」とは、欧米のみならずアジア、中東ほか世界の主要国で大学・大学院の教育を受けた人であれば普通にできることで、その実例を挙げている。

茶坊主に踊らされず、謙虚であっても卑下せず、自信を持って過信せず、権威主義という呪縛から解かれ、自分の頭で考え、「1人の個人として世界に通用する日本人」になるにはどうすればいいのだろうか。本書には、そのためのキーワードが詰まっている。そんな世界でフツーに活躍できる人材を目指す人は、ぜひご一読を。(N) (19cm、309ページ、1700円+税、2013年3月刊)

